東京五輪開幕、「パンデミック」と「猛暑」の 2 つの試練

1 年延期されていた東京五輪が 7 月 23 日に開幕した。パンデミック（感染症の世界的流行）下での夏季五輪としては、スペイン風邪が世界的にまん延していた 1920 年のアントワープ大会（ベルギー）以来となる。とはいえ、ヨーロッパでの感染は収束していたなかでの開催であり、五輪が「欧米のもの」と言われていた時代だったからこそ可能であったと考えられている。

しかし、今回は、当時と比べて人の移動がはるかに大規模であり、依然として多くの人が収束に向けて戦っている状況での開催である。

さらに、東京五輪のもうひとつの大きな課題が猛暑対策だ。一般に暑さというと気温を考えがちだが、国際的な指標としてはいわゆる“暑さ指数”と呼ばれる WBGT（Wet Bulb Globe Temperature、湿球黒球温度）が知られている。WBGT については過去に当コラムでも取り上げてきたので、そちらもご一読いただきたい（「“暑さ指数”でみるマラソン・競歩の会場変更」2019 年 11 月 6 日）。

こうしたなか、東京五輪のテニス競技を統括する ITF（国際テニス連盟）は 7 月 28 日、猛暑による選手の健康面を配慮して、試合開始時間を 29 日から 15 時に変更すると発表した。当初のスケジュールでは、競技初日から 29 日までは 11 時、30 日から 8 月 1 日までは正午の予定であった。ITF によると、IOC（国際オリンピック委員会）、東京五輪大会組織委員会、各放送局、選手、審判、医療専門家らと協議し、さらに 5 種目の残り選手の数や組み合わせなどを踏まえて、開始時間の変更が可能になったという。

もともと、東京五輪でのテニス競技には、主に選手が体感する気温や湿度を対象に、コート上の条件が厳しくなり、プレーできなくなった場合に選手を守るための対策として「エクストリーム・ウェザー・ポリシー（異常気象対策ルール）」が適用されている。ITF が 7 月 25 日に公表したその詳細を見ると、概要は以下のようなものである[1]。

- 大会の審判は直射日光の熱ストレスを測る尺度である暑さ指数（WBGT）を参照する。これには、風速、雲、太陽の角度などを考慮に入れる
- ITF は WBGT の監視レポートを提出する。テニスの競技期間中、10 時から毎日 30 分ごとに WBGT を測定する
- WBGT が 30.1 度に達すると、エクストリーム・ウェザー・ポリシーが発動される
- その場合の選択肢の 1 つである「プレーの変更」が実施されると、審判はその旨を選手に伝える。これにより、シングルスの場合はどちらかの選手の要求に応じて第 2 セットと第 3 セットの間に 10 分間の休憩を取ることができる。ダブルスの場合は第 3 セットの代わ

[1] International Tennis Federation, TOKYO 2020: WHAT IS THE EXTREME WEATHER POLICY?, 25 July, 2021(https://www.itftennis.com/en/news-and-media/articles/tokyo-2020-what-is-the-extreme-weather-policy/)

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

©TEIKOKU DATABANK, LTD.

りにスーパータイブレークで決着をつけるため、10 分間の休憩は与えられない
・選手がコート上にいる間に当ポリシーが解除された場合、現在プレー中の試合が終わるまで当ポリシーは適用される

また、10 分間の休憩中に選手に許されている行為も以下の 5 点と決められている。

・トイレに行くこと
・シャワーを浴びること
・ウェアを着替えること
・何か食べたり飲んだりすること
・医療用ストラップの調整やテーピングの巻き直しを行うこと

さらに、「プレーの変更」が行われている間、医療関係者などを含む諮問グループが招集され、もう一つの選択肢「プレーの停止」を適用するか否かが検討される。プレーを中断するかどうかの判断には、前後 2 日間の天候や医療関係者による懸念事項が考慮される。WBGT が 32.2 度に達することがガイドラインとなるが、これはルールではない、ということなどが記述されている。

実は、今回の東京五輪ではテニス競技が始まった 24 日以降、毎日このポリシーが適用されている。そうしたなかで試合時間が 15 時に変更されたことは、選手の健康面を考えると必要な措置だったと言えるのではないだろうか。もちろん、15 時であっても依然として厳しい環境であるかもしれない。しかし、これまでのように試合の進行とともにどんどん気温が上昇し、肌をじりじりと焼くような灼熱さは避けることができよう。

東京五輪は 1 年間の延期とともに多くの会場が無観客開催であることから、当初想定されていた経済効果が大きく減少するとみられている。このような状況下で行われる五輪が、「パンデミック」と「猛暑」という 2 つの課題に対応できたならば、そこには将来につなぐ新たな遺産（レガシー）が残るのではないだろうか。

（撞球者）

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

©TEIKOKU DATABANK, LTD.